

1 法学部



法学部独自の奨学金制度
「やる気応援奨学金」を利用した
学生の体験をご紹介します

東欧の生活を研究する 目的で留学

私は、2年次の夏休みに一般部門で「やる気応援奨学金」をいただき、ベラルーシのグロドノに3週間、ポーランドのワルシャワとクラクフに1週間滞在しました。グロドノでは、州立ヤンカ・クパーラ大学が開催するサマースクールのロシア語研修に参加しながら、「ベラルーシにおける生活様式と文化の変容」を研究テーマとし、学校や町で行われる活動に参加しました。渡航前にベラルーシについて調べてみると、得られる情報は少なく、滞在予定先の「グロドノ」は大都市であるにもかかわらず、日本語での情報を見つけないことはできませんでした。多くの私の友人がそうであったように、日本で



グロドノ市内

はベラルーシについてほとんど知られておらず、「ロシアの近くの国」程度の認識が一般的なのかもしれません。3週間という限られた期間ではありましたが、現地で生活をし、旧ソ連の1員であったベラルーシという国が独立後、隣国の影響をどのように受けているのか、人々の生活がどのように変化してきたのかを知ろうと努めました。

ポーランドにて

モスクワ経由でポーランド（ワルシャワ）に、そこからバスを利用してベラルーシに入国しました。ポーランドに立ち寄った理由は、隣国同士を比



ベラルーシの民族衣装を着た筆者（中央）

グロドノ、東欧ベラルーシでのロシア語研修

立岩 馨人

法学部政治学科3年
静岡県立土肥高校出身

て、ベラルーシではロシアやウクライナのもので大半を占めており、旧ソ連であったグルジアからの商品も多数ありました。国境沿いのスーパーでもその違いは明確で、現地の生活事情が垣間見えた瞬間でした。

ベラルーシにて

グロドノの語学学校では、授業以外にも毎日さまざまなワークショップやイベントが開催されていました。ベラルーシの文化や歴史を学ぶことを目的として、そのテーマは映画や音楽、神話など多岐にわたり、興味深いものばかり。ロシアの歌やベラルーシ語を学ぶこともできました。伝統音楽についての講義では、民謡の歌い手であった高齢の女性が、「ソ連時代を挟んだことで、受け継がれてきた民謡の多く



法学部の 実務家担当科目のご紹介

法学部事務室
あら 荒井 隆 志

この度は実務家が担当する科目についてご紹介したいと思います。本学法学部は法曹界をはじめ、国家公務員、地方公務員のほか、各業界に多くの人材を輩出しています。各界の第一線でご活躍されている実務家（卒業生を中心）の方に、学生の前で講義をしていただくという法学部ならではの科目が多数存在しています。

「法曹論」はベテランの弁護士、検察官、裁判官の方にご担当いただき、講義の最後には模擬裁判を行います。また、「法曹演習」「法律専門職養成プログラム（法曹特講）」は、主に弁護士の方に講義いただくゼミ形式の科目です。「日本外交の法と政治」は外務省官僚によるリレー講

座、「欧米独占禁止行政と企業実務」は公正取引委員会、「自治型社会の課題」は地方公務員の方に講義いただいております。

「現代社会と新聞」は読売新聞社との提携講座で、政治・国際・生活など各報道領域・紙面について、現場経験の豊富な講師陣から現状と課題について学びます。「大学と社会」は、さまざまな職業（人材、メーカー、金融、情報、公務員など）について社会で活躍しておられる方をお呼びし、自分に向いている仕事は何なのかを考えていくような科目です。

いずれの科目も書籍やメディアで取り上げられる仕事内容のほか、学生の興味や関心を引き出し、キャリアデザインに資する講義を展開して



実務家によるゼミ形式の講義

おります。誌面の都合上、今回掲載したものはほんの一部となりますが、このほかにも特徴的な科目がございます。授業時間割冊子にも「実務家教員が担当する科目」のページがございますので、ぜひご子女に履修をおすすめください。

各科目の詳細な授業内容は大学公式Webサイトからもご覧いただけます。
<http://syllabus.chuo-u.ac.jp/syllabus>

が失われてしまった」と語っていたのが印象に残っています。グロドノに滞在してみると、集合住宅の建築様式や学校教育におけるロシア語の必修化など、ベラルーシはソ連の一員として強い影響を受けてきたことがわかりました。現在も、街の広場の名前が「ソビエト広場」、多くの道路が「レーニン通り」と呼ばれており、「自由の広場」や「ブッシュ通り」など、街のさまざまな所で名前の変更がされてきたグル

ジアとの違いが一目瞭然でした。私は、独立後に違う道を歩んでいる二つの国を見て、そこで暮らす人々はどのように変化を受け入れているのだろうかという興味を覚えられました。一方で、親露国家として知られているベラルーシでは旧ソ連体制を維持し安定しているものと想像していましたが、旧ソ連式の集合住宅から、体制以前に建てられ長年放置されてきた平屋家屋への引越しが、若者の間で年々人気を増してい

るという話を聞きました。「就職はヨーロッパで」と考えている学生も多く、私が現地で出会った学生ボランティアもEUへの加盟を望んでいました。静かではありますが、加速しながら着実に変化を望んでいる社会がそこにはありました。

挑戦の連続で得た貴重な体験

今回の留学は、内陸の国家間を電車やバスで移動したり、他国の学生と

ルームシェアをしたり、深夜に到着したポーランドで迷子になったりと、初めて経験することへの挑戦の連続でした。ロシア語の習得やベラルーシについての学習だけでなく、出会った人々から学ぶことも多く、貴重な体験となりました。これからもロシア語の勉強を続けながら、学生として、あるいはボランティアとして、もう一度グロドノを訪れたいと考えています。



語学学校の先生（中央左）を囲んで